

ISBN978-4-89476-843-7

C3080 ¥3800E

定価 3800 円+税



青山学院大学
総合研究所叢書

一 発話のはじめと終わり

語用論的調節のなされる場所

小野寺典子 編



ひつじ書房

青山学院大学総合研究所叢書

発話の はじめと終わり

語用論的調節のなされる場所
Periphery: Where Pragmatic Meaning is Negotiated

小野寺典子 編
Edited by Noriko Onodera

Joseph V. Dias
(岩井恵利奈 訳)

東泉裕子

小野寺典子

澤田淳

Elizabeth Closs Traugott
(柴崎礼士郎 訳)

Periphery: Where Pragmatic Meaning is Negotiated



ひつじ書房

第6章(日本語訳)

周辺部の *sort/kind of*

一台本の対話に見られるメタ語用論的遊びと
複雑な相互作用／テキスト的效果

ジョセフ・V・ディアス

岩井恵利奈 訳

1. 序論—なぜ左の周辺部と右の周辺部の *sort/kind of* を調べるのか

例のほとんどが書きことばである BNC (British National Corpus: 『イギリス英語コーパス』) でも、話しことばと書きことばのよりバランスの取れた COCA (Corpus of Contemporary American English: 『現代アメリカ英語コーパス』) であっても、コーパスにざっと目を通してみると、圧倒的多数の *sort/kind of* は文中あるいは発話中に現れている〔訳注: 「文中あるいは発話中」の原語は medial positions in sentences or utterances〕。実際、本研究では左／右の周辺部の *sort/kind of* を分析したが、COCA で見つかった例の 99% が発話中に生起していた〔訳注: 「左／右の周辺部」の原語は left and right peripheries。以下、left periphery は「左の周辺部」、right periphery は「右の周辺部」〕。ではなぜ、そのような稀で非典型的である周辺部の表現を調べるのか。

- ・ 左の周辺部と右の周辺部の *sort/kind of* は稀であるが、ネイティブ・スピーカーはそれらを特異とは感じていない。また、後に SOAP (Corpus of American Soap Operas: 『アメリカソープオペラコーパス』) (Davies 2011) の例の中で見ていくように、台本作家は英語の話しことばを再構成する際、左／右の周辺部でそれらの表現を用いることを心地よく

感じている。

- ・ *Sort/kind of* が、より確立した(または少なくともより立証されている)談話/語用論標識がしばしば現れる周辺部へと移動する時、独立して使用される〔訳注: 原語は stand alone〕*sort/kind of* や、周辺部で用いられる *sort/kind of* は、新たな統語的、語用論的、意味論的な領域へと広がりを見せるかもしれない。
- ・ 通時的観点から言語単位を分析し、Traugott (1982) と Traugott and Dasher (2002) は、発話中から移動してきた言語単位は左の周辺部で態度を示したり、テキストを形成する働きを持つことを明らかにした。それらが右の周辺部へ移動すると、よりモーダルの・間主観的な使用となる。*Sort/kind of* が左/右の周辺部で用いられるのは非典型的であるが、それらは新たに生じた使用かもしれない。

以上から、本研究が見ていく問題点は次のようなものとなる。

- ・ *Sort/kind of* の機能は、発話中と周辺部とで何らかの違いがあるか。
- ・ 周辺部では *sort of* と *kind of* の機能に違いがあるか。
- ・ 実際の話しことばで見られる左/右の周辺部の *sort/kind of* と、フィクションで見られるそれらの表現とでは何らかの明白な違いがあるか。換言すれば、フィクション作家や台本作家は、左/右の周辺部の *sort/kind of* を誤って用いたり、誇張して用いたりすることがあるか。あるいは、一層深いメタ言語レベルにおけるそれらの機能について何らかの洞察を与えるか。

1.2 機能、位置、*sort/kind of* の備わる場所

Beeching and Detges (2014: 1) は、談話が展開される時、それは『左』から『右』への進行であるという西洋言語学の説明に注目する。ここから、左の周辺部と右の周辺部の言語要素には異なる機能があるという考えが生じる。

周辺部が話題になる時、問題となるのは「何の周辺部か」である。Beeching and Detges (2014: 1-2) は、発話、項構造、文、あるいは話順との関連からそれを定義できると考える。さらに、行為やコンテキスト中に起こった非言語的要素(例えば、猫のニャーという鳴き声)との関係も指摘する。Onodera (2014: 93) によれば、左の周辺部は *well, so, let's see* といった談話標識が現れる発話頭の位置、右の周辺部は *y'know* や *then* 等の表現が見られる発話末の位置である。

単純に文あるいは項構造の周辺部で *sort/kind of* を捉えようとする、非常に制約的かつ現実的な面で困難さを伴う。一例を挙げると、左の周辺部に現れる発話のほとんどは文の断片であり、その指示対象は先行の発話または話順、あるいは追って見ていくことになるが、時に複数先の発話または話順の中に探さなければならない場合がある。*Sort/kind of* は左/右の周辺部の両方で談話標識として働き、それらは可能な限り広範囲のコンテキストを考慮し調べる必要がある。この理由から、本稿が提示する例の中には、できる限り十分に広範なコンテキストを使って分析が行えるよう、問題となっている左/右の周辺部の項目から3, 4つ先の発話または話順まで提示しているものもある。

1.3 左/右の周辺部に生起する *sort/kind of* の早期の例

本研究では、少なくとも3語かそれ以上からなる修飾要素が後続している *sort of* と *kind of* は、左の周辺部に位置しているとみなし、3語かそれ以上からなる発話が先行している *sort of* と *kind of* は、右の周辺部に位置しているとみなす。そのカウントには、他の明白な語用論標識や相づち表現は含まないものとする。統計比較を行う際、左の周辺部の *sort/kind of* の後にカンマまたはその他の句読点が後続する例はカウントせず、右の周辺部では、カンマまたはダッシュが先行する例はカウントしなかった。独立して使用される *sort/kind of* は、左/右の周辺部に現れているものとしてカウントしなかった。しかし、それらはしばしば豊かな相互作用的・テキスト的な機能を持ち、その相対分布は *sort of* vs. *kind of* の文法化の程度について洞察を与えるものであ

る。よって、それらについても手短かに検討していくことにする。

左／右の周辺部の *sort/kind of* は、OED (Oxford English Dictionary: 『オックスフォード英語辞典』)でも例が挙げられている。また、筆者は昔のラジオドラマを愛聴していたおかげで、そのドラマの台本から早期の例を見つけることができた。以下、年代の新しい順に例を提示していく。

- (1) a. Except I feel like, well, what you're doing anyway is just sitting here and saying all these things just to tease me and to taunt me, **sort of**.

(OED 1959 Psychiatry XXII. 293/1)

<私を感じることは別に、ええと、いずれにしろあなたがしていることは、ただここに座ってそうした諸々のことを言っているにすぎません、ただ私をからかいなじるために、言ってみれば(sort of)。>

- b. WALTER: They come from outside the solar system. **Sort of** an advance scouting party.

(Series: X Minus One Show: Knock Date: May 22 1955 Available

online at https://archive.org/details/OTRR_X_Minus_One_Singles)

<ウォルター：彼らは太陽系の外側から来ます。まあ言ってみれば (Sort of) 先発の偵察隊です。>

- c. (TO ELMER) What, Elmer? Oh, do you think you could? Well, if you wouldn't mind trying ... You see, I'm so nervous with him and he senses it. He's like a horse. You might ... Well, don't exactly rock him, but just a little motion, **sort of**. That's it. Well, he's quiet. You certainly know how, don't you, Elmer?

(Fleischmann's Yeast Hour Show: Nurse's Day Out Date: Aug 09

1934 Available online at <http://www.oldtimeradiodownloads.com/>)

<(エルマーに向かって) 何、エルマー？ ああ、自分ならできると思うの？ ええ、やってみるのに差支えないなら…このとおり、私は

彼にとっても神経質になっていて、彼はそれを感じているの。まるで馬のよう。あなたは…えっと、厳密には彼を揺さぶらないで、ただ少し動かす、みたいな感じ(sort of)。そう。あら、この子静かだわ。あなたはやり方がよくわかっているのね、エルマー？>

1つ目の例は、精神病患者との面談からの抜粋と思われるが、OEDで見つかった左／右の周辺部の *sort of* の唯一の例である。*Kind of* の例は挙げられていなかった。2番目に早期の例は、サイエンス・フィクションを題材とするラジオ放送から見つかったものである。本稿の執筆にあたり、COCAに含まれるフィクションの5つの下位ジャンルにおける *sort/kind of* の生起数を調べたが、その結果、サイエンス・フィクション (Science Fiction) は左の周辺部およびすべての位置における生起数が最も多かった(生起数は100万語あたりに標準化した)。一方、右の周辺部については、サイエンス・フィクションは、児童向け小説 (Juvenile Fiction) (*sort of* の場合) と映画を小説化したもの (Fictionalizations of Movies) (*kind of* の場合) に次いで2番目に生起数が多かった。将来 *sort/kind of* が左／右の周辺部で用いられることをフィクション作家が見通していると考えたくなるが、他のジャンルの作家と比べ、フィクション作家はすべての位置で好んで用いるようである。

(1c) は、見つかった中で最も早期の例であるが、複数の談話標識 (*oh, well, you see, sort of*) の巧みな使用が見られる。それは、感情的な意味合いを上手く表現したり、相互作用的な豊かさを作り出そうとする台本作家の言語使用の優れたメタ言語的感性を表している。こういったプロセスは、その後50年経って初めて言語学者らによって探究され始めることとなる。Aijmer and Stenström (2004: 8) は、英語の話しことばにはそのような標識が含まれ、それらは一般に文法では扱われず、その大半が相互作用的功能を持つと述べている。

1.4 *Sort/kind of* に対する規範

Sort/kind of のユニークな出来事として筆者が覚えている最も幼い頃の記憶

の1つは、筆者がいた4学年のクラスを教えていた修道女が、*you know, like, sorta, kinda* (最後の2つは *sort/kind of* が音韻的縮約されたかたち) をわれわれ生徒がことばの中にちりばめるのを聞きたくないと言った時のことである。彼女がそのように禁じる時以上に、子供の興味を刺激するものはない。人生のかなり後になって、筆者はそれらの禁じられた言語的産物が談話標識あるいは語用論標識と呼ばれるものであることを知ることとなった。他の習慣でもそうであるが、そのような注意を受けるも、筆者はそれらの表現を避けることは無駄だと悟るのであった。

規範文法では、5億2400万語からなるコーパスである BOE (Bank of English: 『バンク・オブ・イングリッシュ』) に基づく場合でさえ、以下のようない言及がなされる。

とりわけ英語の話しことばでは、*these* や *those* が *sort of, kind of, type of* の前で用いられ、それに複数形の名詞が後続するのを耳にすることがある。*Sort, kind, type* それ自体は単数形であるにもかかわらずである。しかし、多くの人々はこの使用を非文法的と捉える…

(Particularly in spoken English, you may hear 'these' and 'those' used before 'sort of', 'kind of', and 'type of' followed by a plural noun, although 'sort', 'kind' and 'type' themselves are in the singular. However, many people regard this usage as ungrammatical...) (Chalker 1996, Section 5.26: 86)

この引用に基づくと、以下の文は「多くの人々」によって非文法的と感じられることになる。

I was asking her what it was like, you know, I mean, what's your weather like and all these sort of boring questions (ibid.: 28)

追って明らかにしていくが、*sort* と複数名詞間のこういった不一致は、不注意な使用が原因なのではない。それは、*sort of* が単に a member of a set に

言及するものから、「程度の修飾要素 (degree modifier)」(Traugott 2008) として使用され始める文法化の段階に遡ることができる。*Sort/kind of* の今日の使用に対して非専門家間で一貫性がなかったり、教育的な規定がなされるのは、その現在に至るまでの目に見えない歴史についての知識不足から生じている。その歴史は最終的に、発話や文のまさに周辺部での使用、さらには完全に独立して使用される表現としての使用を導いてきたのである。

2. *Sort/kind of* に関する先行研究

英語の至るところで目にする *sort/kind of* であるが、それらの表現について、またそれらが文法で、また様々な複雑な相互作用的企てを達成するのに担う役割については、先行研究では決して徹底的に、また十分に記述されて来なかった。コーパス研究からより多くを学べば学ぶほど、より多くの困惑が招かれる。それは、単に *kind of* が *sort of* とどのように異なるのかという問題や、具体的な命題的意味を持つ binominal 構造を起源とするもの〔訳注：もともと NP1 of NP2 の構造の一部 (NP1 of) であったということ。2.1 節も参照〕から、いかにして現在の豊かな談話・語用論的な機能を持つように発達していったのかといった問題に関わる。

幸運にも binominal 構文〔訳注：NP1 of NP2 を取る構文。2.1 節も参照〕の一部であったことで、*sort/kind of* は多くの言語学者らの関心を集め、構文文法の観点から再度分析が行われてきた (Brems 2011; Denison 2002, 2005; Traugott 2008)。彼らはそれらの目立たない表現が文法化を起こしてきた証拠を挙げ、説得力のある主張を行っている。本稿では、「談話標識／談話詞 (discourse markers/particles)」または「調整装置 (adjusters)」(Aijmer 2002: 175)、「自由付加詞 (free adjuncts)」(Traugott 2008: 229)、「語用論標識 (pragmatic markers)」(Aijmer 2008: 74) として様々な言及がなされる *sort/kind of* の比較的最近の使用を分析する。だが、*sort/kind of* の歴史言語学研究を概観することで、今日におけるそれらの機能や使用をより良く理解できるだろう。

2.1 *Sort/kind of* の文法化

Traugott (2008: 219–250) は、英語の程度の修飾要素 (degree modifier) の通時的分析の中で、*sort of* について (また *kind of* についても) 検討した。彼女は *sort of* の文法化過程について説得力のある実証を行っており、それを構文文法の観点に適合させた。彼女が概念化する構造体/構文 (construct/construction) の4つのレベルに *sort/kind of* がどのように関わるかを見てみると、彼女のアプローチが最もよく説明されるだろう。

- ・ **構造体 (constructs)**: コーパスでアクセスされるようなトークン (tokens)。——「変化の場所 (locus of change)」(Traugott 2008: 236) と考えられる。例えば、I'm sort of numb right now.
- ・ **micro- 構文**: 個々の構文のタイプ。例えば、*sort of* は set/group/class の意味から、程度を示したりヘッジをする機能を担うように変化する時、[NP1 [of NP2]] から [[NP1 of] NP2] へと変わる。
- ・ **meso- 構文**: 類似の振る舞いをする特定の構文のグループ。例えば、Traugott は *sort of, a lot of, a shred of* が (程度の修飾要素として) 多くの共通点を持つと指摘した。
- ・ **macro- 構文**: 構造と機能の観点から理解される形式と意味のペア。例えば、程度の修飾要素の構文全般。

Hopper and Traugott (2003: 1–2) は、文法化 (grammaticalization) を言語変化のプロセスと定義する。例えば、特定のコンテキストにおける言語単位がどのように文法機能を担うようになるのか、あるいは、文法単位がどのように新たな文法機能を持つようになるのかといったプロセスである。この研究枠組みの関心は、形態統語的、意味論的・語用論的、さらには音韻的な通時変化にまで及ぶ。Traugott が説明する *sort of* の通時変化は、主に最後の2つのカテゴリーの変化である。Traugott (2008: 225) は、*sort of* の文法化の局所的な段階を年代順に記録し、それらがいかに「時に曖昧な中間状態を伴いながら、均等にきめ細かい、制約された意味論的・語用論的な変化を伴う」

ものであるかを示した。彼女は、近似 (approximative) (a sort of snail) や位置 (locative) (the back of the hotel) を表すなど多種多様な機能を持つ、英語の NP1 of NP2 のパターンを持つ様々な表現を指摘することから始めている。それらの表現の抽象的な構造関係は [NP1 [of NP2]] と表すことができ、主要部 (前景にあると見られる部分) は NP1 である。Traugott (ibid.: 227) は、*kind of/sort of/a bit of/a shred of* の変化に共通した特徴を以下のように体系化する。

[NP1 [of NP2]] から [[NP1 of] NP2] — 主要部が NP1 から NP2 へと移り、修飾の逆転が起こった

Sort は、*of* とより密接な関わりを持ち、2語からなる語彙単位とならずずっと以前は、set や group の意味を持っていた。以下の OED の例にそれが見られる。

- (2) To beholde so fayre and good a **sorte** Of goodly knyghtes.

(OED 1509 S. Hawes Pastime of Pleasure (1845) xxvii. 129)

<とてもハンサムで道徳的に実直な立派な騎士団 (sorte) を見るために。>

- (3) One **sorte** of them was burnt, another **sort** hanged, the thirde drowned, and the fourth **sorte** had no more hurt but their heades cut off.

(OED 1583 T. Stocker tr. Tragicall Hist.

Ciuite Warres Lowe Countries i. 2)

<彼らのあるグループ (sorte) は焼け死に、別のグループ (sort) は首つりにされ、3つ目は溺死し、4つ目のグループ (sorte) はそれ以上痛めつけられなかったが頭を切り落とされた。>

16世紀のある時点で——そして次の世紀までにしっかりと定着してい

—a member of a set を意味する *sort* の部分的な (partitive) 使用が始まる。以下はその例である。

(4) At **sort** of erroneous teachers, and licentious livers, were tolerated.

(OED 1641 J. Tombes Leaven of Pharisaicall Wil-worship (1643) 14)

<誤った教師のすべてのメンバー (sort) と不道德な生活者は、寛容に扱われた。>

Traugott (2008: 228) は、部分的な意味が生じ、NP1 と NP2 の両方が不定冠詞を取る時 (例えば a sort of a (n) (ap) prentice)、「クラス・メンバーシップは一意的に識別可能ではない。それは正確ではない」という推論が可能になったと主張する。これが、次のような程度の修飾要素としての使用を導いた。

(5) Bishop Burnet is even kind enough to make a **sort of** an excuse for Sir Thomas More.

(OED 1846-9 S. R. Maitland Ess. 47)

<司教バーネットはさらに親切にも、トマス・モア卿のために多少の (sort of) 弁解をした。>

この例で含意されているのは、弁解 (excuse) はなされたが、それが十分ではなかったかもしれないということである。したがって、弁解を程度の連続体において見ることになる。部分的な使用は、程度の修飾要素としての使用と平行して続いていった。そして、NP2 で不定冠詞が使われることが減り、*sort of* が他の程度の修飾要素 (例えば *awfully*) のように振る舞うようになると、それが程度の修飾要素として用いられているという解釈がより際立ったものになった。以下はその例である。

(6) Just before Christmas, the workload, it **sort of** doubles and you suddenly

think, 'Okay. It's gone from I can do this to why am I doing this', I think has gone through my head quite a few times

(COCA ACAD StudiesInEducation

Spring 2015, Vol. 47 Issue 1, p. 17)

<クリスマス直前は、仕事量、それはすごいことに (sort of) 2 倍になり、あなたは突然考えます、「わかった。できると思ったけど、なぜ私はこれをしているのだ」と、多分もう何度も私の頭をよぎったことです>

そして、程度の修飾要素として、*sort of* は NP 構文で制約を受けず、命題の意味は減衰し、さらには *sortuv/sorta* のように音韻的縮約が起こり、しばしば副詞の性質を持つようになった。ごく最近では、独立した発話として現れたり、発話頭や発話末の位置に現れるようになった。*Sort of* は、set あるいは group の意味を持つ最初の段階の使われ方を除いて、ここで見たすべての方法で使われ続けている。

Brems (2011: 2) もまた、構文文法の観点から、コーパスから集めた経験的なデータを使い、*sort of, kind of, type of* を——Traugott (2008) のように——binominal 構造を考慮し分析している。しかし彼女は、それらの表現を以下の 2 つの構造のタイプに分類した。

- 1) size (or shape) noun expression (例えば *a bunch, heaps of, a bit* 等) ——“Size Noun Constructions” は SN と表記
- 2) type noun expression (例えば *sort of, kind of, type of*) ——“Type Noun Construction” は TN と表記

Brems (2011) は、TN 構文である *sort/kind of* を通時的・共時的に調べており、その折衷的なアプローチは、現代の多義的な使用を説明しようとする際に多くの重要な洞察を与えてくれる。彼女の主な関心は、それらの表現の文法的な由来〔訳注：原語は pedigree〕、すなわち、共時的な使用がいかにその遺

産を反映しているか——そして特に、その使用が文法化のプロセスに与える洞察——を明らかにすることにある。しかし、Brems (ibid.: 317–320) はそれらの表現が談話標識として使用される時、もはや文法的な境界とは結び付かず、必ずしも先行部分あるいは後行部分を作用域としないと考える。本一冊分にのぼる彼女のその研究では、それらの表現のテキスト的、(間)主観的、その他多岐に及ぶ使用についての議論が行われ、また、いつ独立して使用される表現となるのかについても検討が行われている。

3. 談話標識としての *sort/kind of*

機能言語学理論は、命題内容を形成する文法システムを越えて、様々な構造や資源が——しばしば文法システムに埋め込まれて——命題に関する話し手の相互作用的な態度を伝達することを明らかにしてきた。例えば、英語の法助動詞が、発話の対人的機能と関係していることはよく知られる (Verstraete 2001)。例えば “You must be kidding” (冗談でしょう) は、対話者の発言に対する不賛同を伝達するが、実際にはその前のふざけた発話の確実性について主張しているのではなく、そもそもユーモアが行われていたのかどうか疑いを掛けているのかもしれない。

本稿は法助動詞に焦点を当てるものではないが、ここで扱う *sort/kind of* は、緩和語 (downtoners) (Quirk et al. 1985: 446)、程度の修飾要素 - 兼 - 自由付加詞 (degree modifiers-cum-free adjuncts) (Traugott 2008: 226)、交感的機能を持つ談話詞 (discourse particles with phatic functions) (Aijmer 2002: 48)、付加詞として用いられる TN 構文 (type-noun constructions used as adjuncts) (Brems 2011: 317) として様々なラベル付けされており、それらが複雑に機能する一要因として認識様態法 (epistemic modality) との関わりがある。すなわち、それらは発話において、話し手が命題の背後にある知識についてどう確信を持っているか、あるいはその知識をどう評価し信じているかを知る手段を提供する (Nuyts 2001)。

「何を談話標識とみなせるか」という問題が生じる時、Schiffrin (1988:

327) が提案するのは、分析者はまず談話の単位に着目し、分析者と、そして非常に重要なのが、参加者自身の両者によって特定され分化されるようなチャックにインタラクションの流れを分けていくことである。彼女はさらに、「参加者が共同で作り上げる活動間の境界をどのように提示しているか」を見ることを勧める。

談話標識を特定するための Schiffrin (1988: 328) の提案は、長らく使用され続けてきた。それは次のようなものである。

- ・ 発話または文から統語的に分離可能である。
- ・ 典型的に発話頭(左の周辺部)に現れる。
- ・ 音韻的縮約が起こる。
- ・ 様々な韻律曲線を持つ。
- ・ 談話の広域レベルと部分レベルで、また異なる水準で作用する(すなわち、不確定の意味を持つか、あるいは(言語/話し手に関して)再帰的である)。

これらの基準が、以下の例にどのように適用されるかを見てみる。

(7) ALISON: Well, we're on the mend, actually, **kind of**.

EMILY: Really?

ALISON: Yes. As friends. (SOAP 2010 As the World Turns)

<アリソン：えっと、私たち良い方向に向かっているわ、実際、ある意味で(kind of)。

エミリー：本当？

アリソン：うん。友達として。>

最初の発話では、*kind of* は中心の項〔訳注：“we're on the mend”〕を枠づけする他の2つの談話標識(*well* と *actually*)と一緒に用いられている。*Kind of* には音韻的縮約は見られず、また左の周辺部に位置していない。しかし、統

語的に分離可能であり、談話の異なる水準で、また広域レベルと部分レベルで作用している。それは“we’re on the mend,”という発言の自己修復(self-repair) (Aijmer 2002: 198–199; Kitzinger 2013: 232) への移行を示し、その発言が言い過ぎであったかもしれないという打ち消し(disclaimer)を与える。その意味で、*kind of* は発話レベルの部分的な影響力(内容を主観化している)を持つと同時に、対話者がその命題(“we’re on the mend”)をどのように捉えるかに関する気づきや予示を与えている(間主観化している——Emily が語釈する可能性を予知している)。

(8) “But, darlin’,” she cooed, “you look so handsome in a tuxedo. **Sorta** like James Bond, Clint Eastwood on Oscar night, and Elvis all rolled into one.”

“Now, when did you ever see the King wearing a tux?”

(COCA 2014 Fiction Killer physique: A Savannah Reid Mystery)
 <「でも、あなた、」彼女は優しくささやいた、「タキシード姿とてもハンサムよ。何か(sorta)ジェームズ・ボンド、オスカーの夜のクリント・イーストウッド、エルヴィスを合わせたような感じ。」

「でも、国王がタキシードを着ているのなんていつ見たことがある?」>

この例では、*sort of* は“sorta”と音韻的に縮約しており、Schiffrin (1988: 328) が談話標識の最も現れやすい位置と考えた左の周辺部に現れている。この位置では、直示機能と(間)主観的機能の層化(layering)を見ることができる。この点については本章の第8節で議論する。

Bazzanella (1990: 630) を受け、Aijmer (2002) は、相互作用的性質を支える交感的(phatic)機能を持つ他の「談話詞(discourse particles)」とともに *sort/kind of* を分類する。交感的連結詞(phatic connectives)と呼ばれ、*sort/kind of* は evidentials (与えられた発言の証拠性を示す形式)と考えられる他の表現(I think や actually)と一緒に分類されている。Aijmer は Chafe (1986: 270) を引用し、*sort of* は「最適な記号化可能性(optimal codability)を持つとは言えな

い」と述べる。つまり、*sort of* が修飾するものが、指示されているものを正確に記述し、表現し、または特徴づけているかについては議論の余地があるだろうと主張する。

4. 本研究が使用するコーパスと選定理由

Sort/kind of の分布の違い、および文法的・機能的な違いを調べるため、本研究では2つのコーパスを使用した。一つは、実際の対面会話の例や、フィクションや放送・紙媒体のニュースソースなど様々なジャンルからの例を含む COCA で、もう一つは、アメリカテレビ番組のメロドラマ(いわゆる「ソープオペラ」)のみを扱ったより特殊化された SOAP である。

COCA (『現代アメリカ英語コーパス』)を選んだ理由の一つは、そのサイズにある。4億1千万語からなり、これまでの *sort/kind of* の研究(例 Gries and David (2007))で既に使われている BNC (『イギリス英語コーパス』)と比べ4倍以上の大きさがある。その巨大さは、左/右の周辺部の *sort/kind of* のような低頻度の構文を調査するのに大きな利点となる。また、COCA はジャンル(genres)や使用域(registers)の面でバランスの取れたコーパスである。

SOAP (『アメリカソープオペラコーパス』)もまた、ブリガムヤング大学のサーバーで Mark Davies (2011) が作製し管理しているコーパスであり、2000年代初期からのアメリカソープオペラの台本2万2千本を含み、総語数は1億語にのぼる。台本作家は、メロドラマらしさを助長させるために、特に左の周辺部で *sort/kind of* の豊かな(間)主観的・テクスト的な可能性を引き出すのではないかとということが考えられた。このデータベースを使うことで、語用論標識の基本的な特徴である「本来備わった」メタ言語的性質を越えたメタ言語的な使用が *sort/kind of* にあることが明らかとなる。

4.1 結果のまとめ

左の周辺部・右の周辺部・発話中に現れた *sort of* と *kind of* の分布を比較する表を、付録1a(SOAPの場合)と付録1b(COCAの場合)に挙げた。

COCA では、*kind of* は *sort of* の 2 倍多い例が見られただけであるが、SOAP では、*kind of* は *sort of* の 5 倍以上多く生起している。よりバランスの取れた COCA でも *kind of* への強い選好が見られるが、それをはるかに凌ぐ *kind of* へのはっきりとした選好がソープオペラの台本作家にあることが示されている。Aijmer (2013: 124) が *actually* と *in fact* の研究で明らかにしたように、*sort of* と *kind of* は意味的には違いはない。それらは同じテキストタイプに現れるが、現れる頻度に違いがある。本章では十分な答えを得ることはできないであろうが、次の点は興味をそそる問題である。つまり、*sort of* は文法化がさらに進んでおり、台本作家が利用したくなるような魅力的な豊かな(間)主観的・テキスト的機能を持つと考えられるにもかかわらず、なぜ SOAP では *kind of* がそんなにもより頻繁に用いられるのかである。

両コーパスの例において、*sort/kind of* の使われ方には顕著な類似点がある。それは、どちらも圧倒的に発話中で好まれて用いられていることである。その生起数は 94% かそれ以上にのぼる。しかし、すべての位置での生起を合わせた *sort/kind of* の総計トークンの割合を見ると、*sort/kind of* は COCA よりも SOAP において、左の周辺部と右の周辺部の両方でより多く現れている。(付録 1a, 1b を参照)。これは右の周辺部の *sort of* に特に顕著である (SOAP では右の周辺部での生起は全体の 4.67% であるのに対し、COCA では 0.53% である)。台本作家が(意識的であれ無意識的であれ)周辺部の *sort/kind of* の潜在的可能性に留意しており、以降で明かされる相互作用的・テキスト的な効果をもたらすためにそれらを利用していることを示唆している。またその割合は、COCA に含まれる実際の対面状況で使用される割合よりも高かった。(間)主観的に複雑であり、テキスト性により貢献すると思われるのは左の周辺部での使用であることを考えると、(少なくとも *sort of* に関して) 右の周辺部で最も多く生起しているというのは興味深い事実である。

COCA をジャンル別に見てみると (SOAP は 1 つのジャンルを扱っているため、この見方はできなかった)、すべての位置での生起を合わせた *sort of* と *kind of* のそれぞれの総頻度は、「フィクション (FICTION)」のジャ

ンルよりも「口語 (SPOKEN)」のジャンルで 3 倍高かった。しかし、*sort of* の左/右の周辺部での生起は、(そこまで大きな差ではなくとも)「口語 (SPOKEN)」のジャンルよりも「フィクション (FICTION)」のジャンルでより多く見られた(付録 2 を参照)。これは、ソープオペラの台本作家だけではなく、フィクション作家全般が *sort of* の左/右の周辺部での使用に注意を払っており、現実で使用されるよりも高い割合でそれを用いている証拠である。また、それが *sort of* には当てはまり、*kind of* には当てはまらないという事実は、*sort of* の文法化がさらに進んでいることの表れかもしれない。次節ではこの点について見ていく。

4.2 *Sort of* のより「進行した」文法化の証拠と位置が与える洞察

本稿の第 2 節で見たように、*sort/kind of* は文法化 (Brems 2011; Denison 2002, 2005; Traugott 2008) の軌道にあり、部分的な使用から、程度の修飾要素や垣根言葉として、また他の語用論的に複雑な方法で同時に用いられる形式へと発達してきた。Binominal 構造を起源とし、今では独立して用いられ、左/右の周辺部で用いられることがごく普通になった。*Sort/kind of* が独立して使用される例の分布は、文法化の相対的なレベルを示す 1 つの基準となる。

表 1 SOAP と COCA における「独立して使用される」*sort/kind of* の分布

SOAP		
<i>kind of</i>	総生起の 0.08% (60,637 例中 50 例)	
<i>sort of</i>	総生起の 0.76% (10,650 例中 81 例)	
COCA		
<i>kind of</i>	総生起の 0.02% (190,753 例中 31 例)	
<i>sort of</i>	総生起の 0.16% (83,353 例中 132 例)	

実際の生起数は少ないため、結論を控えめにせざるを得ないが、独立した使用には一貫して *sort of* が好まれる傾向があることがわかる。

独立して使用される場合と同じく、*sort/kind of* が左または右の周辺部に移

動する時、そこで純粋に外延的(denotative)な意味で用いられる例は事実上無いといえる。たとえ見つかったとしても、以下の注目すべき例が示すように、それらは発話中に生起するものとは著しく異なる。

(9) PETE: Whoa, no, Adam Chandler is a pretty scary guy. I mean, he's the **kind of** guy who says, "You're toast," and you're looking over your shoulder for the rest of your life.

COLBY: The **kind of** guy who collects enemies. **Kind of** guy people want to kill. (SOAP 2009 All my children)

<ピート：落ち着け、いや、アダム・チャンドラーはかなり恐ろしいやつだ。つまり、彼は「ただじゃすまないぞ」なんて言う種の(kind of)やつで、これからの人生をビクビクして生きてくことになるぞ。

コルビー：ある種(kind of)敵を集めるやつ。ある種(kind of)人が殺したくなるやつだな。>

発話中で使用されている *kind of* (訳注：2行目の Pete の *kind of*) は、*variety of* または *type of* という指示的意味を持つが、話順が Colby に移り、*kind of* が左の周辺部へと移動していくと、その指示的意味は完全には失われているものの、テクスト的・社会的結束機能に劣ってしまっている。その他に見つかった左の周辺部の *sort/kind of* の例のほとんどすべてにおいては、退化した指示的意味すら持っていなかった。近似またはヘッジの意味、またテクスト的・間主観的な特徴が規範となっていた。それは、左の周辺部の *sort/kind of* に不定冠詞 *a* で始まる名詞句が後続する場合でも同様であった。発話中でそのような名詞句が後続する場合、*sort/kind of* は高い確率で外延的意味を持つのである。

発話中で使用される時、*kind of* は (*sort of* と比べ) より外延的意味——つまり *variety of* または *type of* の意味——を伝達しやすい。このことは、両者のうち *sort of* の方がより文法化された形式であることのさらなる証拠である。SOAP で発話中に現れた *kind of* の例 6 万 637 件のうち最初の 100 件を調べ

たところ、57 件(57%)が *type/variety of* の指示的意味を持っていた。一方で、発話中に現れた *sort of* の例 1 万 650 件のうち最初の 100 件を調べてみると、たった 36 件(36%)しか指示的意味を持っていなかった。

5. 位置が意味と機能に与える影響—*actually* と *in fact* との類似点

Actually と *in fact* のテクスト的・語用論的機能の議論の中で、Aijmer (2013: 125) は、「位置はおそらく、解釈を制約している最も重要な形式的特徴である」と指摘した。これは *sort/kind of* にとっては誇張かもしれないが、位置が極めて重要な役割を果たすことについては疑う余地はない。それは、以下の SOAP から見つかった左の周辺部の *sort of* の例から明らかである。

(10) JESSE: What is this, Tad?

TAD: Uh, it's a coming-out party. **Sort of** a celebration to welcome you back to the land of the living.

(SOAP 2008 All my children)

<ジェシー：これ何、タッド？

タッド：あー、お披露目パーティーさ。言ってみれば(Sort of)君の社会復帰祝いさ。>

もし“The coming-out party is sort of a celebration...”のように、*sort of* が発話中に位置する 1 つの発話として表現が再構成されたら、*sort of* は主として外延的な意味で理解されるであろう。しかし、左の周辺部に置かれることで、“coming-out party”は celebration として特徴づけされにくくなり、(間)主観的な性質が増すこととなる。

Tognini-Bonelli (1993) の研究を受け、Aijmer (2013: 112) は、*actually* は言われたことを言い換え、異なる見解を取るために戦略的に用いられると指摘する。左の周辺部(必ずしもその位置でというわけではないが)の *sort/kind of* はまた、言い換え・話題転換・自己訂正に作用し、それはたいてい敵対的と

いうよりは協調的な仕方になされる。以下の SOAP からの例がその一例である。

(11) VICTOR: I guess you're right. (Sighs) she was rather distant with me at the hospital. **Sort of** overjoyed to see Brad Carlton.

NICK: Well, of course. That's the way it should be.

(SOAP 2004 Young and Restless)

＜ヴィクター：君は正しいだろうね。(ため息)彼女は病院で僕に対してかなりよそよそしかった。何だか(Sort of)ブラッド・カールトンに会えてすごく喜んでた。

ニック：ああ、もちろんさ。当然だよ。

*Sort of*は話題転換というより再焦点化しており、緩和するにはあまりにも極端な描写を皮肉っぽく和らげている。ここで興味深いのは、*actually*が*sort of*と代替でき、申し分のない交換がなされるが、しかしその場合、皮肉や、*sort of*が含意する特徴づけについて議論しようといった明白な誘いが生じなくなる点である。左の周辺部における*actually*対*sort/kind of*の選択は、台本作家または他のフィクション作家の文体的な理由によるところが大きいためである。*Actually*は意外さ(Oh 2000: 243)、*sort/kind of*は不明瞭さという異なる核心的意味を持つにもかかわらずである。この互換性は、発話中では文法的な観点から成り立たず、右の周辺部では、交換されるとたいい発話が非常に不自然となり、発話を文体的に同じものと見なせなくなってしまう。これは、左の周辺部が特有の特徴を持つさらなる証拠である。といっても、左の周辺部では*actually*と*sort/kind of*の機能の仕方に重要な違いがないと言うのではない。一例を挙げると、左の周辺部の*sort/kind of*は、省略された人称代名詞(または随意的なコピュラあるいは法助動詞)を含み、人称直示や、それがもたらす前方照応関係を通して豊かなテキストの結束効果が生み出されるが(この点については、本稿で追って議論する)、*actually*の使用にはそのような省略表現は含まれない。

Aijmer (2013: 107) は、*actually*は意味というよりはむしろ「意味の潜在力」、つまり「意味・副次的意味・含意・卓立的／非卓立的意味・内包からなる豊かな意味表出」を持つのだと主張する。同じことが*sort/kind of*についても言えるだろう。次節では、結束機能と、それが複雑さやメタ語用論的機能に与える／によって与えられる影響との関連から、右の周辺部と左の周辺部における意味の潜在力について検証していく。

6. 台本作家による *sort/kind of* のメタ語用論的使用

語用論標識は、指標的であり、意味の展開がコンテキストに依存するというまさにその本質から、メタ言語的であると論じられる。しかし、ここで議論するメタ言語的レベルとは、対話者たちが語用論標識それ自体を議論の対象として持ち出す場合のものである。これはメタ語用論的 (metapragmatic) (Jaworski et al. 2004: 62) と呼ぶことができる。

自然発生的な状況における対話について興味深いのは、*sort/kind of*が言にくい事実をはぐらかしたり、イライラさせるくらいどっちつかずの態度を維持したり、あるいは単に応答を最小限にするための方略として用いられている時でさえ、その使用がめったに意義申し立てを受けないことである。対話者によるそのような意義申し立ては、それらの表現が特定のコンテキストで用いられる適切性を明示的に焦点化する。そのような例は、成人間インタラクションを含む話しことばの例の中には一例も見られなかった。COCAでは、テレビ放送されたインタビューの中で一例だけ見つかった。そこでは、インタビューを受ける子供が質問にはっきりと答えず、繰り返し*sort of*に(時には独立して使用される*sort of*が発話全体を形成し)訴えていることを記者にからかわれていた。ことによると、互いにフェイスを救済する目的に志向し、*sort/kind of*の使用を論点とすることを避ける会話の暗黙のルールがあるのかもしれない。

しかし、SOAPでは、以下の例のように対話者が*sort/kind of*の使用に苛立ちやフラストレーションを感じ、その表現自体がインタラクションの焦点と

なる例は容易に見つかった。

(12) ABBY: Yeah. But, like I said, I mean, I'm seeing someone, **kind of**.

JED: How "**kind of**" is "**kind of**"?

ABBY: Well, you know, not hot.

JED: **Kind of**.

ABBY: Right. **Kind of** understood.

JED: Hard to compete with "**kind of** understood."

(SOAP 2007-02-27 Days of Our Lives)

<アビー：うん。でも、言ったように、つまり、付き合ってる人がいるの、ある種(kind of)。

ジェド：ある種(kind of)ってどうある種(kind of)？

アビー：ええと、だから、燃えるような感じではないの。

ジェド：ある種(Kind of)。

アビー：そう。ある種(Kind of)ね。

ジェド：「ある種(kind of)ね」には対抗できないな。>

右の周辺部の *kind of*〔訳注：1行目の Abby の *kind of*〕が引き金となって行われる確認チェック〔訳注：2行目の Jed の発話〕では、範疇的(categorical)な応答が期待され、*kind of*の尺度的(scalar)な性質への話し手の(したがってまた台本作家の)メタ言語的な理解が示されている。Jed の質問が "Are you or aren't you seeing someone?" といったよりフェイスを脅かす (Brown and Levinson 1987: 61) 質問にもなり得たことを考えると、実際の "How "kind of" is "kind of"?" という質問は、その *kind of*の尺度的な含意に「付き合っただけでいる」というふうにも見ることができる。また、それはひょっとしたらふざけて浮ついた感じでなされているのかもしれない。台本作家は右の周辺部の *kind of*を相互作用を促進させる資源として捉え、ドラマチックな効果を生み出すのに利用している。しかし、COCA の入念な調査によって明らかとなったが、実際のコミュニケーションではこのレベルのメタ語用論的

な気づきはほとんど見られなかった。右の周辺部の *sort/kind of*がフィクションで用いられるという事実は、それらが自然発生的な談話で見つかった際、そのほとんどは発話中から移動してきものだという主張への反論となる。それらは明らかに、単に認知処理のための表現として作り出されたもの以上のものだからである。

次の例では、対話者はより協調性に欠け、*kind of*の考えうる尺度的な解釈は楽しまれず、その表現の矛盾が見過ごされない。実際、その表現のばかしさは、それが真似され繰り返されることで茶化されている。ここでも、台本作家が右の周辺部の要素を用いてメタ語用論的な遊びをしていることは、右の周辺部がその標識に対して持つ潜在的可能性について彼らが認識していることを示している。

(13) ATTENDANT: Their mother, a Miss China Lee, left us your name in case of emergency. You're the boys' stepfather?

NICK: Technically, **kind of**.

ATTENDANT: You've married the boys' mother?

NICK: Technically, **kind of**.

ATTENDANT: Then technically, **kind of**, they're your children, sir.

(SOAP 2007-08-17 Days of Our Lives)

<係員：彼らの母親、チャイナ・リーさんは、緊急時に備えてあなたの名前を残しました。あなたは、その男の子の継父ですか？

ニック：厳密には、そんな感じです(kind of)。

係員：その男の子の母親と結婚していましたか？

ニック：厳密には、そんな感じです(kind of)。

係員：では厳密には、そんな感じで(kind of)、彼らはあなたのお子さんです。>

それぞれの対話者によって "Technically, kind of." が繰り返されることで、対話をテキストとして、話者たちを意味の交渉者として結びつける語彙的結束

性がもたらされている。次節では、左の周辺部の *sort/kind of* を取り巻く文法的結合装置、特に指示と省略の重要性について取り上げる。

7. 左の周辺部における結束性、一貫性、複雑なテキスト機能

テキスト言語学(de Beaugrande 1980; van Dijk 1972)の主な関心は、省略・代名詞・結束性・一貫性といった文法が対処することのできない側面であるが、その関心は、談話標識あるいは語用論標識としての *sort/kind of* が焦点となる際に表面化する。Enkvist (1976: 65) を引用し、Hasselgård (2004: 65) は、結束機能はしばしば文頭または発話頭に位置する要素に見られると述べる。

Fetzer (2012: 447) は、一貫性(coherence)は論理的な一貫性と連結に関わる一方、結束性(cohesion)は談話のセグメント間の意味関係を示す言語使用に関わりと指摘する。文法的結束性は、省略・指示・接続・代用といった問題に関わり、一方語彙的結束性は、連語・反復・メトニミー・同意性・反意性と関係が深い。

以降の左の周辺部の *sort/kind of* の議論では、反復(repetition)の結束機能についても手短に取り上げるが、主な関心は文法的結束性にある。Fetzer (2012: 457) が、左の周辺部の *sort/kind of* は「ボトムアップに処理され、重要な指標的機能を果たし、談話の部分的な領域を広域的な領域へと結びつける」と説明していることからわかるように、それらの表現は談話連結詞(discourse connectives)の機能を果たす。

省略(ellipsis)と直示(deixis)は、特に左の周辺部の *sort/kind of* の議論に関わる。なぜなら、純粋にフィラーとして機能する比較的稀な左の周辺部の使用を除いて、人称代名詞(itを含む)や随意的なコピュラ・法助動詞が省略されているからである。それにより、対話者、聴衆、またその他の観察者は、結束的脈絡を追うことによって一貫性を作り出すことが求められる。

直示は、he・there・nowといった人称・場所・時間を表す表現について言及するものであるが、左の周辺部の *sort/kind of* を取り巻く直示のタイプは

ほとんど必ず人称直示であり、人、もの、あるいは命題がコンテキストから推論される必要がある。おこがましいかもしれないが、本稿では、省略された代名詞(+/- コピュラあるいは法助動詞)は、左の周辺部の *sort/kind of* の意味化(semantizations)と見なすこととする。その位置に現れる *sort/kind of* を分析する時、省略されている項目は一貫して、また確実に推論可能である。それらの推論により、より広範囲の談話の中で前方照応(またより稀に後方照応)を突き止めることが可能となり、広く行き渡る豊かなテキスト性を味わうことができるようになる。誤解のないよう言うておくが、これは位置に特有の意味化である。

8. 複雑さの様々なレベルと、それらが連結性と一貫性に与える影響

Baicchi (2004) と Bruti (2004) は、イタリア語と英語の書きことば・話しことばのデータを使い、テクスト的・言語的な現象が持つテクストの複雑さを計る尺度を作り出そうと取り組んできた。Baicchi の研究は、標題や見出しに着目し、複雑さ・有標性・解釈可能性がどのように相互に関係しているかを示し、一方 Bruti は、後方照応装置の分析を行った。同じ目的を持つそれらの個々の研究に触発され、筆者は左の周辺部の *sort/kind of* の直示機能と照応関係の複雑さを判断する基準を考案しようと試みてきた。ここでの具体例の検討により、前節に挙げた点を明らかにできればよいと考える。これは試験的なものであり、決して徹底したものではない。

複雑さ——それは難しさとゆるい相互関係にあると考えられる——を判断するために調べるべき基準は、次のようなものとなる。

- 1) 省略された直示要素は、一語／一概念を表すか、それとも命題全体を表すか。
- 2) 含意はどの程度複雑であるか(例えば、因果関係または他の論理的関係が推論される必要があるかどうか)。

- 3) 前方照応的推論ではなく、後方照応的推論である。
- 4) 指示対象は左の周辺部の *sort/kind of* からどれくらい離れているか——それと関連して、指示はその話順内で行われているか、それとも別の話順へと及んでいるか。

以下、より単純なものから複雑なものへという順に例を挙げていく。いくつかの基準が同じ例で適用される場合もある。複雑さが増すにつれ、テキストの豊かさが増していくという大まかな対応がある。

8.1 一語／一概念 vs. 命題全体

最初の例は、複雑さの尺度の最も低い極に位置づけられる例である。左の周辺部の *sort of* の直前に前方照応の指示対象〔訳注：“smell”〕があり、推論されるのは命題全体ではなく一語／一概念である。

- (14) I was only vaguely aware of it. But aware enough to be puzzled.

It was an unpleasant smell. **Sort of** sweet but putrid.

(COCA FIC: Postmortem Author: Patrucua Daniels Cornwell

Publisher: Charles Scribner's Sons)

<私はぼんやりとしかそれがわかりませんでした。しかし戸惑いました。不快な臭いがしました。何か(Sort of)甘い、でも腐った臭いでした。>

次の例のように、指示がかなり直接的と思われる場合でも、言語内照応(endophora)と外界照応(exophora)が組み合わさることで、含意の複雑さが増す。

- (15) BUZZ: The church is pretty, though. **Sort of** gives you a new way of looking at weddings.

OLIVIA: Can I ask you a personal question?

(SOAP 2005-11-23 Guiding Light)

<バズ：素敵な教会だね、でも。何か(Sort of)結婚式の新しい見方ができるね。

オリヴィア：個人的な質問してもいい？>

一見、省略された直示代名詞 it〔訳注：Sort of の前に省略されている it のこと〕は“church”を前方照応していると思われるが、素敵な(pretty)もの・場所が人の見方を変えるかもしれないという知識があることで、テキスト内・外からの資源が必要となり、複雑さが増すこととなる。

8.2 含意された因果関係

以下は、「彼が出かけた理由は、緊急な事のためであった」という因果関係を推論する必要がある点で、やや複雑な含意を持つ。緊急事態の成り行きについての一般的な知識があることから、そこまで難しい推論ではないが、複雑さは確かに増している。

- (16) LIZZIE: Josh. Where's the reverend?

JOSH: Hi. He had to run out. **Sort of** an emergency thing.

Are you okay? (SOAP 2007-07-18 Guiding Light)

<リジー：ジョシュ。牧師はどこ？

ジョシュ：やあ。彼は出かけなければならなかったんだ。何か(Sort of)緊急の用事で。大丈夫かい？>

8.3 後方照応的指示

以下の例に見られる含意はよりずっと複雑であり、特に対話者に関する詳細な背景知識がない場合には難しい。

- (17) OCTAVIO: Sonia – more beautiful than ever. I guess you know why I'm here.

SONIA: Somebody's got to avenge Padilla's death. **Sort of** thought I'd see you sooner than this.

OCTAVIO: Good. Let's not make this hard.

(SOAP 2004-08-06 One Life to Live)

<オクタビオ：ソニア、これまでにないほど美しいよ。なぜ僕がここにいるかわかるね。

ソニア：誰かがパディリャの死の敵を討たなければならない。まあ (Sort of) もう少し早くあなたに会えると思っていたけど。

オクタビオ：よし。簡単に済ませよう。>

ここで含意されているのは、Octavio が Padilla の死の敵討ちに来て、来るのに時間がかかったということである。この含意には Octavio がどのような人物か〔訳注：Padilla の死の敵討ちをするはずの人物ということ〕についての知識が必要であり、それがなぜ彼が来のかということに結びつく。*Sort of* の指示対象が I (つまり Sonia) であることは推論できないため、これは後方照応的指示である〔訳注：Sort of の前に I が省略されており、その指示対象が後出の "I'd see you..." の I (Sonia) であることは、sort of が発話された時点ではわからない〕。Sonia は "Sort of thought [you'd walk right into this bar, did you?]" と言おうとしていたのかもしれない〔訳注：その場合、Sort of の前には you が省略されており、その指示対象は後出の you (Octavio) となる〕。つまり、後方照応の指示対象が発話されてはじめて、その表現 (*sort of*) の意味が理解され始めるのである。

以上、*sort/kind of* が左の周辺部で持つ複雑なテキスト機能について、またそれらがいかに社会的結束性(間主観性)と関係しているかについて例証した。

9. 右の周辺部における *sort/kind of* の注目すべき修辭的使用についての簡潔な解説

COCA における右の周辺部の *kind of* の例の大半が、原稿のある報道ニュースと、より自然発生的な報道ニュースの両方の中で見つかった。自然発生的なものの場合、*kind of* はしばしば発話中からかなりランダムに移動しているように見え、認知処理の必要性か、またさらには話し方の癖が動機となっているように思われる。以下はその例である。

- (18) CAITLIN: I remember one time, I was going up to get a math sheet, and there was this person who I thought was beginning to be my friend **kind of**. And I was going up to get a sheet, and she touched my elbow which was really dry and rough at that time. And she, like, yelled really loud, ew.

(COCA SPOK: NPR—Skin Deep 15/04/09)

<ケイトリン：ある時のことを覚えているわ、数学のシートをもらいに行って、そこに友達になってきたと思っていた子がいたの、ある種の (*kind of*)。それでシートをもらいに行って、彼女はその時すごく乾燥して荒れていた私の肘に触ったの。それで彼女、その、本当に大きな声で叫んだの、うわっ、て。>

しかし、原稿のあるニュース、あるいは新聞や雑誌の中の書き起こされたインタビューでは、*sort/kind of* はこれから述べられることが前の内容にいくらか矛盾することを示す修辭的装置として使用されている。以下はその例である。*Sort of* は発話中から計画的に移動されている。

- (19) He and his now ex-wife, Lesly, a fitness instructor, would take Svein and his older brother up to a ski hill for days on end in their motor home. They

were in full support, **sort of**.

"I was thinking what any other mother would think. It was pretty frightening,"

Lesly said. "I was worried about him..."

(COCA NEWS: Denver Post: An example of Tuft love 09/02/27)

＜彼と、今や彼の前妻であるフィットネス・インストラクターのレスリーは、よくスウェインとその兄をキャンピングカーで何日も続けてスキー場に連れて行った。彼らは全面的にサポートされていた、ある意味(sort of)。

「私は他の母親が考えるであろうことを考えていました。それは本当に恐ろしかったです」

とレスリーは言った。「私は彼が心配でした。…」＞

右の周辺部の *sort of* は、“They were *sort of* in full support” のように発話中に位置づけられることもできただろう。しかし、自然発生的な会話では、*sort/kind of* がある表現の中間に位置づけられることは珍しくないが、ニュース記事では、その位置づけは明確に有標(marked)となる。発話中に生起していたらもっぱら主観的な(態度を示す)機能を持つであろうが、右の周辺部で用いられると、読み手の方へシフトしようというコミュニケーションが意図され、間主観的となる。それは“with a caveat that will now be explained” と言い換えられるだろう。*Sort/kind of* が左の周辺部で成し遂げることと比べると、この使用はむしろ部分的な談話を標識する(テキスト的な)影響力を持つ。こういった右の周辺部の *sort of* の例は、ニュース記事では珍しくはない。そのような修辭的使用の例の多くを、原稿のある報道ニュースや、新聞記事や雑誌の中の書き起こされたインタビューの中で見つけることができる。

以下のように、原稿のない例では、原稿のある例で見つかった修辭的で談話を標識する使用は見つからなかったが、日本語の終助詞「ね」に似た明白な間主観的機能が見られた。

- (20) WHITFIELD: Welcome back to the NEWSROOM where really right now it's the chat room, which means you join Jacqui and I in a little chitchat about all kinds of interesting novel things going on. I guess our selection, they're all kind of economy-related **sort of**.

JACQUI-JERAS: A little bit.

(COCA SPOK: CNN Newsroom Duct Tape Prom 09/03/15)

＜ホイットフィールド：再び「ニュースルーム」です。現在はチャットルームの時間です。ジャッキーと私が、現在起こっている様々な面白く新しい事柄についておしゃべりします。我々のセレクション、それらはすべてまあ言ってみれば経済に関するものになりそうですね(sort of)。

ジャッキー＝ジェラス：多少。＞

(20)の終わりの *sort of* は、前に出てきた(同じ文中の) *kind of* を単に繰り返したものであり、*kind of* と同じく緩和機能を持つように思われる。この例の *sort of* は、(19)で右の周辺部で用いられていた *sort of* とは完全に異なる。後者では、後続するものがちょうど今表現されたものを無効にする、言い換えれば、予想の裏切りを示す明白な談話機能が書き手によりもたらされていた。

10. 結論

本章では、時折左／右の周辺部に現れる、一般的に遭遇する談話／語用論標識を分析した。COCA で見つかった *sort/kind of* の例の 99% は発話中に位置しており、SOAP では、左／右の周辺部への位置づけはやや多かったものの、それでも極めて少なく、94% から 99% の例が発話中に生起していた。Chomsky (2016) は、以下のように述べる。

言語学において、われわれは皆、自身が問うている種の現象がしばしば風変わりであることを知っている。それらはほとんど起こらない現象である。実のところ、それらは最も興味深い現象である。なぜなら、直接に人を基本原理へと導くからである。

(In linguistics we all know that the kind of phenomena that we inquire about are often exotic. They are phenomena that almost never occur. In fact, those are the most interesting phenomena, because they lead you directly to fundamental principles.)

*Sort/kind of*のそうした稀な位置づけを調査することは価値があったと言える。なぜなら、新たに生じた使用や意味を示し、語用論標識が周辺部へと移動して担う共通の特徴について光明を投じるからである。

コーパスでは、*kind of*と*sort of*の分布に明白な違いが見られた。SOAPでは、*kind of*は*sort of*の5倍以上多く生起していたが、COCAでは、*kind of*は*sort of*の2倍多い例が見つかっただけであった。ここから、ソープオペラの台本作家には*kind of*へのはっきりとした選好があるという結論が導ける。

位置に関しては、左/右の周辺部の*sort/kind of*は、COCAよりもSOAPでより多く見られ、それは特に右の周辺部の*sort of*に顕著であった。*Sort/kind of*が周辺部でどのように作用するのかについて台本作家が注意を払ってきたこと、そして、テクスツ的・対人的な効果をもたらすためにそれらの構文を利用していることが示されている。

フィクションと自然発生的な状況における*sort/kind of*の機能には明白な違いが見られた。フィクションでは、*sort/kind of*の使用は時に対立〔訳注：対話者間の対立〕を招いていたが、成人間インタラクションを含む話しことばの例では、対話者による*sort/kind of*の使用への異議申し立ては見つからなかった。

最後に、台本作家による右の周辺部の*sort/kind of*を用いたメタ語用論的な遊びもまた、それらの語用論標識の潜在的可能性への鋭い気づきを示すものである。しかし、その創造力は自然発生的な状況では未だ存在せず、おそら

く今後も決して存在しない機能の考案に過ぎないのかもしれない。

参考文献

- Aijmer, Karin. (2002) *English Discourse Particles: Evidence from a Corpus* 10. Amsterdam: John Benjamins.
- Aijmer, Karin, and Anna-Brita Stenström. (2004) Discourse Patterns in Spoken and Written Corpora. In Karin Aijmer and Anna-Brita Stenström (eds.) *Discourse Patterns in Spoken and Written Corpora. Vol. 120*, pp. 1–13. Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- Aijmer, Karin. (2008) Modal Adverbs in Interaction—Obviously and Definitely in Adolescent Speech.” In Terttu Nevalainen, Irma Taavitsainen, Päivi Pahta and Minna Korhonen (eds.) *The Dynamics of Linguistic Variation: Corpus Evidence on English Past and Present*, pp. 61–83. Amsterdam: John Benjamins.
- Aijmer, Karin. (2013) *Understanding Pragmatic Markers: A Variational Pragmatic Approach*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Baocchi, Annalisa. (2004) The Cataphoric Indexicality of Titles. In Karin Aijmer and Anna-Brita Stenström (eds.) *Discourse Patterns in Spoken and Written Corpora. Vol. 120*, pp. 17–38. Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- Bazzanella, Carla. (1990) Phatic Connectives as Interactional Cues in Contemporary Spoken Italian. *Journal of Pragmatics* 14 (4): pp. 629–647.
- Beeching, Kate, and Ulrich Detges. (eds.) (2014) *Discourse Functions at the Left and Right Periphery: Crosslinguistic Investigations of Language Use and Language Change*. Leiden: Brill.
- Brems, Lieselotte. (2011) *Layering of Size and Type Noun Constructions in English (Vol. 74)*. Berlin: Walter de Gruyter.
- Brown, Penelope, and Stephen C. Levinson. (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage* 4. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bruti, Silvia. (2004) Cataphoric Complexity in Spoken English. In Karin Aijmer and Anna-Brita Stenström (eds.) *Discourse Patterns in Spoken and Written Corpora. Vol. 120*, pp. 39–64. Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- Chafe, Wallace. (1986) Evidentiality in English Conversation and Academic Writing. In Wallace L. Chafe and Johanna Nichols (eds.) *Evidentiality: The Linguistic Coding of Epistemology*, pp. 261–273. Norwood, N.J.: Ablex.
- Chalker, Sylvia. (1996) *English Guides 9: Linking Words*. London: Harper Collins.
- Davies, Mark. (2010) More than a Peephole: Using Large and Diverse Online Corpora. *The Bootcamp Discourse and Beyond: Special Issue of International Journal of Corpus Linguistics* 5

- (3): pp. 412–418.
- De Beaugrande, Robert. (1980) *Text, Discourse, and Process: Toward a Multidisciplinary Science of Texts*. Norwood (NJ): Ablex.
- Denison, David. (2002, September) History of the Sort of Construction Family. In *Second International Conference on Construction Grammar*, Helsinki 7, pp. 279–304.
- Denison, David. (2005) The Grammaticalisations of Sort of, Kind of and Type of in English. Paper presented at *New Reflections on Grammaticalization (NRG): 3*, University of Santiago de Compostela, 3, pp. 17–20.
- Enkvist, Nils Erik. (1976) Notes on Valency, Semantic Scope, and Thematic Perspective as Parameters of Adverbial Placement in English. *Reports on Text Linguistics: Approaches to Word Order*.
- Fetzer, Anita. (2012) Textual Coherence as a Pragmatic Phenomenon. In Keith Allan and Kasia M. Jaszczolt (eds.) *The Cambridge Handbook of Pragmatics*, pp. 447–467. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gries, Stefan Th, and Caroline David. (2007) This is Kind of/Sort of Interesting: Variation in Hedging in English. Volume 2: Towards Multimedia in Corpus Linguistics. In *Studies in Variation, Contacts and Change in English 2: Towards Multimedia in Corpus Studies*. Helsinki: Research Unit for Variation, Contacts and Change in English (VARIENG).
- Hasselgård, Hilde. (2004) The Role of Multiple Themes in Cohesion. In Karin Aijmer and Anna-Brita Stenström (eds.) *Discourse Patterns in Spoken and Written Corpora. Vol. 120*, pp. 66–87. Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- Hopper, Paul J., and Elizabeth Closs Traugott. (2003) *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jaworski, Adam, Nikolas Coupland, and Dariusz Galasinski. (eds.) (2004) *Metalanguage: Social and Ideological Perspectives (Vol. 11)*. Berlin: Walter de Gruyter.
- Kitzinger, Celia. (2013) Repair. In Jack Sidnell and Tanya Stivers (eds.) *The Handbook of Conversation Analysis*, pp. 229–256. Hoboken (New Jersey): Wiley-Blackwell.
- Nuyts, Jan. (2001) *Epistemic Modality, Language, and Conceptualization: A Cognitive-Pragmatic Perspective. Vol. 5*. Amsterdam: John Benjamins.
- Oh, Sun-Young. (2000) Actually and in Fact in American English: A Data-Based Analysis. *English Language and Linguistics* 4 (02): pp. 243–268.
- Onodera, Noriko. (2014) Setting Up a Mental Space: A Function of Discourse Markers at the Left Periphery (LP) and Some Observations about LP and RP in Japanese. In Kate Beeching and Ulrich Detges (eds.) *Discourse Functions at the Left and Right Periphery: Crosslinguistic Investigations of Language Use and Language Change*, pp. 92–116. Leiden: Brill.

- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, Jan Svartvik and David Crystal. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language (Vol. 397)*. London: Longman.
- Schiffrin, Deborah. (1988) *Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tognini-Bonelli, Elena. (1993) Interpretative Nodes in Discourse: Actual and Actually. In Mona Baker, Gill Francis and Elena Tognini-Bonelli (eds.) *Text and Technology: In Honour of John Sinclair*, pp. 193–212.
- Traugott, Elizabeth Closs. (1982) From Propositional to Textual and Expressive Meanings: Some Semantic-Pragmatic Aspects of Grammaticalization. In W.P. Lehmann and Y. Malkiel (eds.) *Perspectives on Historical Linguistics*, pp. 245–271.
- Traugott, Elizabeth Closs, and Richard B. Dasher. (2002) *Regularity in Semantic Change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Traugott, Elizabeth Closs. (2008) Grammaticalization, Constructions and the Incremental Development of Language: Suggestions from the Development of Degree Modifiers in English. In Regine Eckardt, Gerhard Jäger and Tonjes Veenstra (eds.) *Trends in Linguistics: Variation, Selection, Development*, pp. 219–250.
- Van Dijk, Teun A. (1972) *Some Aspects of Text Grammars: A Study in Theoretical Linguistics and Poetics*. The Hague: Mouton.
- Verstraete, Jean-Christophe. (2001) Subjective and Objective Modality: Interpersonal and Ideational Functions in the English Modal Auxiliary System. *Journal of Pragmatics* 33 (10): pp. 1505–1528.
- Chomsky, Noam. (2016) “On linguistics and limits of big data.” Lecture presented at conversations on linguistics and politics with Noam Chomsky. <<http://www.rochester.edu/newscenter/conversations-on-linguistics-and-politics-with-noam-chomsky-152592/>> 2016.7.8
- Davies, Mark. (2008–) *The Corpus of Contemporary American English (COCA): 520 million words, 1990–present*. <<http://corpus.byu.edu/coca/>>
- Davies, Mark. (2011–) *The Corpus of American Soap Operas: 100 million words*. <<http://corpus.byu.edu/soap/>>
- OED Online. “sort, n.2”. Oxford University Press. <<http://hawking2.agulin.aoyama.ac.jp:2166/view/Entry/184953?redirectedFrom=sort+of>> 2016.6.27
- The British National Corpus, version 2 (BNC World). Distributed by Oxford University Computing Services on behalf of the BNC Consortium. <<http://www.natcorp.ox.ac.uk>>

付録 1a

SOAP (Corpus of American Soap Operas: 『アメリカソープオペラコーパス』)

Sort of	生起数/100 万語	左の周辺部(トークン) /	右の周辺部(トークン) /	発話中(トークン) /
	あたりの頻度	100 万語あたりの頻度	100 万語あたりの頻度	100 万語あたりの頻度
	10650 / 106.5	139 / 1.39	497 / 4.97	10014 / 100.14
	(全体の 1.31%)	(全体の 4.67%)	(全体の 94.03%)	
	発話中での生起に対する左の周辺部での生起の割合: 1:75.62			
Kind of	生起数/100 万語	左の周辺部(トークン) /	右の周辺部(トークン) /	発話中(トークン) /
	あたりの頻度	100 万語あたりの頻度	100 万語あたりの頻度	100 万語あたりの頻度
	60637 / 606.37	712 / 7.12	199 / 1.99	59726 / 597.26
	(全体の 1.17%)	(全体の 0.33%)	(全体の 98.50%)	
	発話中での生起に対する左の周辺部での生起の割合: 1:83.88			
	発話中での生起に対する右の周辺部での生起の割合: 1:300.13			
	周辺部に生起した <i>kind of</i> : 総計 911 トークン(100 万語あたり 9.11 - 総生起中の 1.50%)			

付録 1b

COCA (Corpus of Contemporary American English: 『現代アメリカ英語コーパス』)

Sort of	生起数 /100 万語	左の周辺部(トークン) /	右の周辺部(トークン) /	発話中(トークン) /
	あたりの頻度	100 万語あたりの頻度	100 万語あたりの頻度	100 万語あたりの頻度
	83353 / 15.84	337 / 0.06	442 / 0.08	82574 / 15.69
		(全体の 0.40%)	(全体の 0.53%)	(全体の 99.07%)
	発話中での生起に対する左の周辺部での生起の割合 : 1:245.03 発話中での生起に対する右の周辺部での生起の割合 : 1:186.82 周辺部に生起した <i>sort of</i> : 総計 779 トークン(100 万語あたり .15 – 総生起中の 0.93%)			
Kind of	生起数 /100 万語	左の周辺部(トークン) /	右の周辺部(トークン) /	発話中(トークン) /
	あたりの頻度	100 万語あたりの頻度	100 万語あたりの頻度	100 万語あたりの頻度
	190753 / 36.24	618 / 0.12	196 / 0.04	189939 / 36.09
		(全体の 0.32%)	(全体の 0.10%)	(全体の 99.57%)
	発話中での生起に対する左の周辺部での生起の割合 : 1:307.34 発話中での生起に対する右の周辺部での生起の割合 : 1:969.08 周辺部に生起した <i>kind of</i> : 総計 814 トークン(100 万語あたり 0.15 – 総生起中の 0.43%)			

付録 2

左の周辺部・右の周辺部・すべての位置における SORT OF - COCA (『現代アメリカ英語コーパス』)

ジャンル	左の周辺部: 481 生起			右の周辺部: 813 生起			すべての位置: 83353 生起		
	頻度	サイズ (M)	百万語あたり	頻度	サイズ (M)	百万語あたり	頻度	サイズ (M)	百万語あたり
SPOKEN	139	109.4	1.27	234	109.4	2.14	49140	109.4	449.21
FICTION	216	104.9	2.06	349	104.9	3.33	14237	104.9	135.72
MAGAZINE	62	110.1	0.56	111	110.1	1.01	8194	110.1	74.42
NEWSPAPER	59	106.0	0.56	105	106.0	0.99	7338	106.0	69.25
ACADEMIC	5	103.4	0.05	14	103.4	0.14	4444	103.4	42.97

左の周辺部・右の周辺部・すべての位置における KIND OF - COCA (『現代アメリカ英語コーパス』)

ジャンル	左の周辺部: 652 生起			右の周辺部: 302 生起			すべての位置: 190753 生起		
	頻度	サイズ (M)	百万語あたり	頻度	サイズ (M)	百万語あたり	頻度	サイズ (M)	百万語あたり
SPOKEN	285	109.4	2.61	170	109.4	1.55	96076	109.4	878.28
FICTION	262	104.9	2.5	99	104.9	0.94	30856	104.9	294.14
MAGAZINE	69	110.1	0.63	14	110.1	0.13	24504	110.1	222.54
NEWSPAPER	31	106	0.29	17	106	0.16	24593	106	232.09
ACADEMIC	5	103.4	0.05	2	103.4	0.02	14724	103.4	142.37